

# 世界遺産になった中国民家

呉 東航◎興昌建築事務所代表／芝浦工業大学客員教授

本稿では多くの中国にある世界遺産の内、住まいにかかわるものを三つ紹介したいと思う。

## ◎福建の土楼

おそらく多くの方はテレビなどで見たことがあると思うが、一度見たら忘れられないほどインパクトの強烈な形である。

中庭を囲んで巨大な建物に、多くの家族が集まって住む、いわゆる集合住宅であるが、分譲でも賃貸でもなく、家族の人口構成によって部屋が配分される。同じ建物に住む多数の家族が、同族か、ある程度の血縁関係をもつケースはほとんどである。所有する部屋数や、向きや、階数などに違いがあるが、基本的に平等で、貧富の差もほとんどないと考えてよい。

このような建物は、福建省南部、アモイから百数十キロ先の山奥に分布している。世界遺産になるために高速道路が開通され、今は車3時間ほどで辿り着けるが、以前は大半の住民が山から出たことがなかったといったほど辺縁の地域だった。

その住民は「客家」という部族で、独自の言葉と生活文化をもつが、民族とは認められず、数百年前戦乱のため、遥か北の中原地方からこの地に逃げ込んで住み着き、だから漢民族なのだ。福建省のほか、広東省や湖南省にも広く住んでおり、同じくほとんど山奥である。

土楼と呼ばれるとおり、これらの建物は厚い壁に囲まれ、壁の厚さは下階では2m近く、最上階でも1mほどになることもある。粘土で打たれたが、中に木組や竹組や石などが埋められ、土の粘性を高めるために米を混ぜたという。建物への入り口は一箇所しかなく、その扉は厚い木と鉄板で頑丈につくられた。さらに強行の侵入を阻むため、上から投石や放水できる仕組みになっている。

中は木造で、最高6階建になるものもあるが、柱梁はほとんど丸太である。中庭には祠や、学堂などの公共スペースがあり、1階には世帯分の台所、洗い場が集まり、井戸も掘られたケースが多い。

このような建物、このように固まって暮らさなければならぬのは、防犯のため以外は何もない。元々戦争難民として山奥に逃げ込んだのに、それでも城塞のような建物でないと身の安全を守れない。そこには危機意識の分の危険が疑いなくあった。

福建の土楼は、自衛と自立を果たした難民キャンプだと筆者は捉える。そのおかげで人々は生き延びてきた。しかし、そこからは富が生まれてこない。

## ◎徽州建築

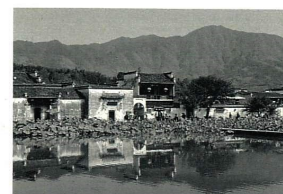
揚子江流域の南側、山々に囲まれた古来徽州という地域があり、緑と水が豊かな、美しい村々が点在している。これらは世界遺産に登録され、単なる観光地のみならず、水辺にいつも大勢の絵描きや建築の学生がスケッチしている。まるでこれを見ないと中国の美を語れないほどの景色である。

この景色をつくりだした建築は「徽州建築」という。徽州建築は外見に白い壁、黒い屋根に統一され、妻壁は屋根よりも高く立ち（壁勝ち）、機能的に防火のためである。壁の上部には屋根の勾配に合わせて段差が設けられ、さらに頂部に丁寧に瓦が敷かれて小さな屋根を演出し、強い個性的なスタイルがもたされている。これは「馬頭壁」といい、もともと中国特徴的な建築様式の一つである。このような建物が「小橋流水」、「柳暗花明」の間に植え付けられ、山水画に描いたような景勝が広がっている。

徽州建築は四周をほぼ無開口の壁に囲まれ、中には吹抜（中庭）が設けられ、規模によって2進1明堂（中庭一つ）、3進2明堂（中庭二つ）のように、北の四合院の配置と似ている。吹抜は中国語では「天井」



①福建の土楼俯瞰



⑧徽州建築の集落



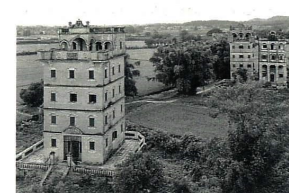
⑨開平碉樓の集落



②福建の土楼内部



④徽州建築をスケッチする学生たち



⑥田んぼのど真ん中に立つ碉樓

といい、換気や採光の役割を果たす。建物は木造の2階または3階建が多く、使った木材が製材で彫刻も多く施されている。祠など公共的な建物には銀杏の材を使うことが多い。臭いから鳥や虫がよらず、耐久性が優れるそうである。

山なので農地が少なく、男が年中商売に出かけ、ほとんど家にいない。常時住んでいるのは老人、婦人、子どもだけである。このため、個々の家族の独立性と防犯は重要視され、中から玄関ドアを閉じれば、外とほぼ完全に遮断できる。

徽州建築は商人たちの金庫であると筆者は考える。家族と財産をその中に収めておけば、自分は安心して商売に走ることができた。しかし、後に社会主義体制となって商売が許されず、この辺は衰退と貧困に陥り、文化大革命の時に大いに破壊を受けた。

## ◎開平碉樓

三つ目は筆者の故郷広東省にある「開平碉樓」である。世界遺産といってもそれほど古いものではなく、百年位前に建てられたものである。

碉樓とは、要塞のような、奇抜な建物を意味する。田んぼのど真ん中に突然、それぞれ独立した、4、5階建の白い建物が現れ、不思議と思われても仕方がない。これらは、地元出身の華僑の人たちが建てた一戸建住宅であった。華僑とは外国へ出稼ぎに行った中国人を指す。彼らには外国で儲かったら、地元へ帰って立派な家を建てて見栄を張る風習がある。

これらは多分、中国最初の鉄筋コンクリート造住宅だと考えられる。ここに使われた建築資材はすべて、

当時ヨーロッパの植民地であった東南アジアから輸入したものである。最先端技術を用いて前人未踏の高さに達して、さすが格好良かったと感じたはずだった。

効用的にもまず防災によい。この地は雨が多く、度々河川が氾濫し、そうなら上階に避難でき、家が流される心配もいらぬ。その場合でも生活できるように、各層とも台所が設けられた。普段は多世帯住宅として、兄弟同士がそれぞれの階で半独立に暮らすことができる。

次は防犯に有利である。建物が頑丈で、かつ高く、匪賊が簡単に登れない。屋上から投石できるし、銃撃する穴も設けられている。窓は鉄板、ガラス、鉄柵、網戸の四重構造となるものもある。

床、天井、手すりなどの仕上げは非常に繊細で綺麗に作られている。水洗トイレ、浴槽、洗面台は、中国のほかの民家には見られなかった水まわりの設備である。井戸から各階への給水管も整備されている。

豪華だが、実際はあまり住まなかつた。家主たちはのちに、ほとんど家族そろって故郷を離れて外国へ移住したのであった。これらは彼らが故郷に建てた墓石だと捉えてもよからうか。世を去るのではなく、故郷を去るのに遺した証として。

建物が遺産として残されるケースは二つあるといわれる。一つは大事に使われてきた。もう一つは忘れられた。これらの場合はどのケースだろうか。建物はそうであっても、そこに住む人々は果たして大事にされてきたか、それとも取り残されたか。

(ウー ドンハン)